

Q. 【小西氏へ】 目録への思いが希薄になった現在の人材育成について

A. 目録への思いが希薄になっているのは確かで、それは図書館業務の中での「目録」の相対的位置低下と連動しているのかと思います。ただ、これが「図書館への思い」が希薄になっているでしたら難しいのですが、「図書館への思い」がある人でしたら育てることが可能かと思います。まずは仕事に真摯に向き合ってくれば、その仕事から学び育っていくのではないのでしょうか。私は常々、人はどこで育つのかを考えてきましたが、先ず一つは、仕事を通して、しかも少しきつめの仕事を与えられた場合。それを乗り越えることで育ちます。次に他の図書館を見ること、それも海外だともっと良いのですが、ランガナタン博士の英国留学も彼を偉大な図書館学者に導きました。三点目は IAAL でもやっていますが、研修会に出ることだと思います。この三つで図書館員は育つと考えています。

Q. 【牛崎氏へ】 お話にあった人事政策の部分は、図書館において非常に大きな課題だと近年感じています。本学でも人員減の傾向、若い世代でキャリアが続いていかない傾向、長期配置をしてくれない点を危惧しています。学内のコンセンサスを得たり、あるいは人事にアピールする上でこういった点を考えていったら良いのではないかということをも是非ご教示いただければと思います。

A. オールマイティーな答えはないと思っています。職員数が全体的に減り、かつ平均年齢が上がっていく状況はどこでもそうかと思っています。つまり採用数そのものが減少している中で、図書館にも回したいけれど他の部局に配置しているということだろうと想像します。私がやったこととして、司書資格の有無は別として、民間にいる人の中で卒業生を中心に人材を採用したということもありました。多分それは難しいという気もする。人事担当の部課長に誰が影響力をもっているのでしょうか、つまりは総長、理事長クラスですね。学内に様々な部局があって、要望事項はてんこ盛りな訳です。その中で、図書館も減員計画に協力してくれたから、今度はこういう人材を出そうと言って人事が動いてくれば良いのですが。さらに学内で影響力を持つ人たちが図書館のことをどう考えているのか、つまり今後の図書館をどうしたいと思っているか、総長、学長、教学担当理事がどう考えているのか、という観点から、彼らに対する、手っ取り早くはないが学内への図書館認知度を高める普段からの情報をアップしていくこと。それは、会議体でもそうですし、図書館が頑張っていることを示して、それを見た人たち、学生、教員から、学部長、総長、学長とうまくいけばそのように広がっていきます。そう言った普段からの積み重ねで、図書館に乱暴な人事はできないよということをも、人事当局に知らせていくこととお思います。

もうひとつ、大学によっては難しいかもしれませんが、非専任スタッフとして大学直雇用や委託のスタッフたちが図書館専任職員より沢山いる訳です。その中でとても能力のある、図書館のことをよく勉強している若手あるいは中堅の人たちを、普段からよく見ておいて、そういう人たちをどうやって採用に結びつけていくかを、これからは考えていったらどうでしょう。私の勤務していた大学では事例は多くはありませんでしたが、採用の方向性としてこれを認めていました。アウトソーシングの中にも非常に良い人材が育っています。そう言ったところにも普段から目を向けていく必要があると

思っています。答えになっているかわかりませんが、無手勝流に様々やっていかなければいけないということを共有できればいいと思いました。

司会：今お話にあったように、専任職員以外の方にも優秀で、図書館のことをよく勉強し、共に考えている人が沢山いると思います。質問、ご意見ありましたらお願いします。

Q. 今、NACSIS についてシステムの共同調達・運用が検討されていて、各図書館にアンケートをとられたと思います。実際の今後の図書館システムについて、それぞれの大学図書館でも検討が進められると思うのですが、そのあたり、どういうふうに関動いていって、人材の面も含めてどのようになっているのかということが、今とても気になっていることです。IAAL のみなさんにご存知でしょうか。ご意見いただければと思います。

A. (高野) まだ、「これから委員会」の議事録からだけで、読み取れない部分が非常に多いと思います。ただ、2022 年についての検討が着々と進められているのだということは、議事録からだけでも分かります。2022 年に動き出すとすると、予算化できるよう 2021 年今年の秋には具体的にある程度決まっていなければならないことだと想像します。正に遠い未来のことではなくて、かなり近い将来のこととして、どういう図書館システムになっていくか、どういう共同の形態で維持されていくか(これを、「調達・運用」という言い方をされている)、皆さんアンテナを張り巡らせて、意識を持ってニュースを今後注視していただきたいと思います。

…いただきたいということを私の方から申し上げるのはおかしなことですが、小西先生の講演を振り返ると、目録を共同分担でやっていこうというのは非常に画期的でした。それを続けてきた 50 年があり、今後に向けて今、また大きな変革期にあるといっても間違いではないと思います。NACSIS-CAT だけではなくて、世界中でデータを共有しようという在り方は言われていますね。システムについては NACSIS-CAT だけではなくて、早慶ではまた別の共同の形をとられているのもあります。ネットワークやシステムを、狭義に捉えるのではなく、世界的な視野で捉えれば、データとデータを繋げるような持ち方で、お互いに共有できるような持ち方で維持していこうというのが、図書館の専門の人が考えた在り方だと思うのです。最初の質問に「目録への意識が希薄になっている状況」とありましたが、今日のこの講演会をきっかけに、目録への意識を高く持ってもらえるようになってもらえればというのが、企画者の希望です。「目録」のことは図書館人にとってひと事ではありません。図書館の協働を支えるポイントとなるところであり、みんなで情報を共有していこうという考え方があったことを思い起こしてみましよう。大学図書館の多くが参加している NACSIS-CAT がどうなっていくのか、どういう形で共同していくのか、というご質問があがったことは、個人的にこの講演会を企画してよかったと嬉しく思いました。5/20 は、2022 年まで 1 年半しかない時期でもあり、今のご質問で、エポックメイキングな事柄に立ち向かうのだという意義を再確認できたのではないのでしょうか。

Q: 公立大学と国立大学が違うところを実感している。一口に大学図書館と言っても、設置主体や専門学部等で異なり、公立大学図書館を一口で語ることは難しいことがわかってきました。これまでの（特に牛崎氏の）お話で、ユーザ第一の原点に戻って、ユーザに評価されるいろいろな政策を大学の執行部に説明していかないといけないと思いました。一方で、オープンサイエンス、オープンアクセスという話があって、大学図書館はデータ管理の役割とか、資料を収集するというよりはサービスとしてのディスカバリーなど、アクセス（図書館が情報源の中心ではないわけで）という考え方も変えていかなければならない、難しい時期にあると思います。小規模な、また、公立大学の図書館にいると、今日の話題にあまり上がらなかった「研究支援」についても関心があります。

A. (小西) 講演の中でも触れましたが、ヨーロッパの図書館などを使っている日本人研究者からよく聞くのは、「よく来てくれた」「使えるものは何でも使って良いよ」「何か手助けはいるかい」というホスピタリティに溢れた図書館が多いということです。つまり、まず私たち図書館は利用者への「ホスピタリティ」という原点に立ち返らなければならないというのが私の主張です。

1980年ごろの私の体験ですが、レファレンスサービスの利用者の大半は研究者でしたが、当時は入手し難い資料を図書館に頼るところがあったので、資料入手を支援することそのものが研究支援につながると考えていました。今はちょっと違う「研究支援」に取り掛かっていくかというお話だと思いますが、私の答えとしては、まず「利用者が満足して帰るような」サービスをしようというところに戻ってしまいます。

A. (牛崎) その質問は、むしろ質問者ご自身が考えておられて、今後、発表していただけるのではと期待しています。私は国立大学の経験がないので、軽々に申し上げられませんが、大学教員（私立大学に限って言えば）は、自分の研究環境は自立的に自身で持っています。図書館に頼るのは、自分の研究以外の、何か読みたい本があるとか、ちょっと辞書を調べたいとかです。従って、図書館は学生が使うところだという意識が、私立大学の場合非常に強い。ただ、今「研究支援」ということで考えたのは、学生のために「ラーニングアドバイザー」を配置しているところが多いですね。大学院生を充てるといった方法で。研究といっても、研究にはレベルなんてなくて、研究をしたいという熱い思いがあって、様々な人が一線級の人から、大学院生まで、研究職にあると思います。特に若い研究者をどうやったらサポートできるかという観点で、ラーニングアドバイザーを置いたと同じ発想のものを、何と呼ぶか、職制として「リサーチアシスタント」（通称 RA）のようなものと連携することも考えられます。よく聞くのは、文科省の理解があまりなくて、あるいは設置主体の理解があまりなくて、とにかく予算がないという話をよく聞きますね。日本は公的資金が教育、研究に対して非常に遅れていることが、年に何回かメディアで露出するわけですが、資金的な手当に関して言えば、図書館の仕事としてみて連携する方向はあるのではないかという気がします。図書館は前向きだけれども、研究者側にニーズが本当はないのか図書館に求めているのか、図書館と研究者が同じテーブルで時間を持ってないのは忙しいからか分かりませんが、もうちょっとお互いに知恵を絞った方がいいのではないかというのが、私の感想です。

(質問者) URA(University Research Administrator)のようなものを設置したという経験はあります。例えば、論文の盗用監視ソフトの管理をシステム管理に慣れている図書館でやってくれないかという話もありました。おっしゃる通り、ニーズがあるところと話をして、新しいサービスを作っていくということは、連携に繋がるのかと思いました。

また、やるべきことは「デジタル化」です。日本語の電子書籍がなかなか進まず、学術的なコンテンツが少なく、海外から日本の資料の電子化の遅れを指摘されます。もう、ILL や DDS の時代ではないと言われており、そこら辺も進めていければ、図書館のプレゼンスは上がっていくのではないかと感じています。